



記載の記事は宇宙線研究所ホームページ (http://www.icrr.u-tokyo.ac.jp/ICRR_news) からでも御覧になれます。

あいさつ……………梶田隆章 1

所長退任に際して……………鈴木洋一郎 3

あいさつ

梶田隆章

宇宙線研究所長になって1月経ちました。今までとはかなり違う仕事の内容で、まだ慣れて来たとは言えない状況です。従って、現在書けることは限られています。現時点で考えていることを書かせていただきます。

現在、世界的に見て宇宙線研究は黄金期と言っても過言でないような感じがします。私が知るだけでも、 10^{20} eV 領域の最高エネルギー宇宙線の観測では新たな装置による大規模な国際共同研究が始まり、もしかしたら最高エネルギー宇宙線を生成している天体が同定され、最高エネルギー宇宙線天文学ともいうような新たな研究分野が開拓されつつあると予感させます。また宇宙線の起源を探る手段として、高エネルギーガンマ線やニュートリノの観測が非常に大切ですが、近年のガンマ線観測の進展は本当に目を見張るものがあります。また、高エネルギー宇宙ニュートリノの観測もいよいよ発見が可能な規模の実験になってきました。重力波検出も世界中で感度向上の努力が続けられ、いよいよ10年以内に観測される可能性が高くなってきたと思われ。ダークマターやダークエネルギーの正体が何であるかという問題は非常に興味深く、これらの研究も活発に進められています。それとともに、広い意味の宇宙線を用いて素粒子の世界を探る研究でも大きな成果が得られています。ニュートリノ振動、すなわち



ニュートリノの質量、が宇宙線によって生成されたニュートリノの観測で発見されたこと、また、太陽ニュートリノの研究でも別な種類のニュートリノ間のニュートリノ振動が確認されたことなどが、近年の成果のハイライトと言えましょう。

さて、目を日本の宇宙線研究と宇宙線研究所に向けてみます。スーパーカミオカンデはニュートリノ振動の発見で大きな成果を上げたことは誰もが認めることと思います。スーパーカミオカンデは今後も重要な研究成果をあげて行くものと期待しています。一方、宇宙線研究所が目指すことは、共同利用研究所として宇宙線のいろいろな分野で日本の研究が常に世界をリードすることでしょう。いつまでも

スーパーカミオカンデの成果ばかりに頼っているわけには行きません。新たな魅力ある研究を進める不断の努力が必要です。附置研究所での新たな大型研究を進める仕組みが未整備のまま国立大学が法人化してしまったことは残念です。しかし、状況は改善の方向に向かっていると考えられますので、我々は宇宙線の研究の魅力を今まで以上にアピールし、我々の研究をいろいろな方々に理解してもらう努力を続けなければいけないと思います。もちろん、重要な科学的研究成果を出すことが一番大切であることは誰もが認めることと思います。しかし、それと共に我々の研究成果をより広い研究者コミュニティや一般社会に知ってもらうことも非常に重要と思われま

す。例えば、科学研究費補助金などの外部資金を得て研究を進めて行きたいのであれば、宇宙線の研究は現在世界中で何が問題で、何がわかり、どのような画期的発見があり、日本の宇宙線研究あるいは宇宙線研究所はどのような貢献をしてきており、今後どのようなことが我々に求められているかを、素粒子・原子核・宇宙・天文などの近隣の分野の方々にも理解していただかねばなりません。更に研究経費が科研費の枠に収まらないような研究計画を遂行しようとするなら、より広範な方々に理解してもらうことが不可欠です。一方で現在研究者は非常に忙しくなっており、残念ながら少し離れた研究分野のことを論文などによって知ることは難しくなっているように感じます。従って、我々の研究を知ってもらいたければ、積極的に外部に研究成果を発信・報

告するという態度が不可欠と思われま

す。この点は是非皆様にも理解していただき、進めたいと思いま

ただし、繰り返しますが、一番大切なことは魅力的な研究を遂行して、重要な研究成果を得ることです。国立大学の法人化以降、6年に一度中期計画を策定して、それをもとに活動を進めることが求められております。研究計画を外から決められた期間に合わせて策定し進めることに関して、この制度に基礎研究がなじむのかとの思いもありますが、制度がそうなっている以上、我々の研究計画もこれに合わせざるを得ない側面があります。次期中期計画期間が2年後に始まるので、これからの1年くらいの間は、今後6年程度の期間の研究所の研究の方向がどうあるべきかをいつも以上に真剣に考える時期です。これを良い機会と考えて、研究所員1人1人が真剣に考え、議論を深めていくことが不可欠だと思います。幸い宇宙線研究所は議論をして方向性を定めて行く良い伝統が根付いているように感じていますので、よろしくお願

いします。

以上、今思うことを書きましたが、まだ所長になって1月の新人の書いたことです。今後皆さんとの意見交換や、外部の状況の変化でここに書いたことを軌道修正することもあるかと思

所長退任に際して

宇宙線研究所神岡宇宙素粒子研究施設 鈴木 洋一郎

法人化という荒波のなかに放り込まれ、翻弄された4年間であった。4年間の所長人生の大半は「大型予算をどう通すか」に使われた。法人化直後は「予算の現状」が分からず迷走が続いた。最初は正直、大型計画も出来ると思ったが、法人化後の仕組みのまま要求をしても埒が明かないことがだんだんはっきりしてきた。文科省に行けば、総合科学技術会議の議員さんと話をしたらどうか、審議会の委員と話をしたらどうか。そこへ行けば、次は学術会議と話したらどうか、と何周も何周も堂々巡りを繰り返していた。しかし、法人化後の研究所における大型計画推進の問題点が少しずつではあったが、いろいろな場所で浸透していったと思う。前天文台長の努力で学術会議に「基礎科学の大型計画」を議論する分科会が設置され、大型計画推進に問題があることが、広く知られるようになった。マスコミの論調にもそのころから基礎科学研究をサポートする記事がちらほら見られてきた。そしてようやく文科省の審議会の下にワーキンググループが設置され、議論が開始された。しかし、これはその1年前にスタートすることが期待されていたものが遅れに遅れたものだ。とにかく進み方が遅かった。また、この審議会の議論は当初の話とは少しずれて、国公私立大学すべての研究所の枠組み、新しい共同利用・共同研究のありかたにまで踏み込んだものになった。ただ、いまだに本当に何が起こるのかわからない。しかし、逆に研究所としては将来に対して、前向きに考えることができる大きな機会でもある。次期中期計画期間へ向けて、この1-2年が肝心であり、新所長の下で、新しい考え方に沿った研究所のビジョンをぜひ作りあげてほしい。大型計画も推進できる枠組みができたが、よく考えると、財源の変化は別として、仕組み上は法人化前にほぼ戻ったということである。研究所の次期大型研究推進は、お膳立てができたので、ぜひ頑張ってもらいたい。後は当事者達の問題である。

法人化の良いところは積極的に利用すべきだ。大学からの借金が可能になった。後で返済が可能なら、集中投資ができる。外部資金で雇用する特任教員の給与は原則自由に設定できるようになった。研究所では、給与のガイドラインを決めているが、優



秀な人には、これにこだわらずに高給を出すべきだ。ただ、それに必要な潤沢な財源を確保できるかは研究者の問題だ。これに反して、通常の教員はほとんど増えない仕組みになってしまった。これは、新しい大型計画を推進するときなどに深刻である。大学内で、通常の教員を内部措置で手当する仕組みもできたが、多くは望めない。

物事が動くには時間がかかる。辛抱強い対応が必要である。(自分のためにやったのではないかと陰口を言われそうだが) 都市手当を地方の施設につける働きかけをした。これは、運よく同様に地方の施設を持つ他部局長のサポートや人事労務担当の理事等の理解もあり、全学の動きとなり、仕組みとして達成に至った。しかし、言い出してから出来上がるまでに、まる3年かかっている。私も所長をやって、ずいぶん辛抱強くなった。

科研費の不採択理由に「所長をやっているのか」という事を書かれたことがあった。この研究提案は、ようやく昨年度、所長在任中に採択されたが、数年前の最初の提案時には、世界最高感度を持つ「独走」的研究を予定していたが、この2-3年、アメリカ・ヨーロッパ等でプログラムが急進展し「良い競争」になってしまった。数年前に採択されていれば、今頃、確実に先を進んでいたと思うと残念である。とにかく、「所長」を理由の一つに不採択にして欲しくなかった。

世界トップ拠点プログラムとして、昨年(07年)10月から数物連携宇宙研究機構(IPMU)がスタートした。この提案を考えていた当初は、研究所にな

んらかの役に立つものと思っていたが、公募要領がだんだん固まってくるにつれ、当初の考え方では公募の要求を満たすことができず、研究所のためという観点からは、離れたものとなった。期待されていた方々には申し訳ない結果であった。しかし、IPMU自体は村山さんを機構長に迎え、数学から理論・実験を含めた全く新しい形の研究所となった。これまでの研究所とは異なる人事・給与形態を備え、研究を最優先した新たな仕組み作りの模索が始まっている。IPMUからは、今後多くの成果が期待できると思われる。宇宙線研究所も人の交流などを通して、IPMUと協力してやっていくことができる。IPMUには厳しい評価もあり、なんでもかんでも自由にやるというわけにはいかないが、お互いの協力により新たな研究成果を期待したい。

私の4年間の研究所の運営に関して、教員の皆さんとはそれほどぎくしゃくはなかったように思う（知らぬは本人だけか、あるいは、なにも実質やらなかったからか？）が、もっと議論ができるような運営をした方が良かったかもしれない。将来計画検討委員会を設置して行った将来計画の検討は、私の任期末と入院時期に重なり、中途半端な形で新所長に引き継いでしまい申し訳なく思っている。研究所の抱える柱の研究が、次のステップへゆく重要な時期であり、将来への検討・議論は、もっと以前から進めるべきであった。以前と違い、科学研究費でも比較的大型の研究が推進でき、最近では、振興調整費などにも大学から出した提案が採択されるようになっていく。予算要求も、概算要求のみでなく多様

な戦略をとるべきであろう。新所長よろしく申し上げます。

私の在任中にあった柏の事務の合同化も大きな問題だった。合同当初は、柏合同事務部企画課が宇宙線研究所の総務をみるという形であった。ようやく名実ともに宇宙線研究所担当課となり、さらに予算・決算係が配置され、研究所をサポートする形が整った。これは、これまでの歴代柏事務部長の努力によるものと、また同時期の柏の他の部局長の皆様のご理解によるものと感謝している。もう一步先まで、行きたいところであったが、次は、海洋研の柏移転に際して、どのような事務を構築するかが重要な節目となろう。私は、多くの優秀な事務職員にめぐまれたと思う。おかげで、日常的な運営が実にスムーズにいった。少人数の事務なので、職員人事に際しその辺を配慮してもらえたのではないかとも思う。

とりとめもないことの羅列で、書きたいことの半分も書けなかったが、4年間、大きな事故や問題もなく過ごせたことは、正直言って胸を撫で下ろしている。ただ、大型研究の行方を見ることができなかったことと、研究所の将来の研究の展望が出来上がらなかったのは残念だ。

最後に、至らぬ私をサポートしていただいた研究所の教職員の皆様に深く感謝いたします。特に4年間、私へ言いたい文句も押さえて（一度だけ爆発したが）、私を實によくサポートしていただいた黒田前副所長には特に感謝いたします。私は研究に戻り（今、研究リハビリ中）、今後は研究の成果で研究所に貢献したいと思います。

No.66

2008年6月30日

東京大学宇宙線研究所

〒277-8582 千葉県柏市柏の葉5-1-5
TEL (04) 7136-5121 又は 0578-85-9609 (神岡)
編集委員 佐川宏行 安部 航